琉球大学学術リポジトリ

米国管理下の南西諸島状況雑件　啓発・広報(Ⅲ)

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2019-02-01
	キーワード (Ja): 佐藤総理訪米, 啓発、広報活動
	キーワード (En):
	作成者: -
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/43484

44/27/16

ナンクン 新角 ニハ立。

報 (手)

アメリカ局長
参事官
北米第一課長

沖縄返還交渉に関する
総理府(広報室)の全面広告

44.11.10
北米一(石河)

1. 11月10日付東京新聞及びサンケイ新聞はそれぞれ違った内容の沖縄関係全面広告記事を掲載しているところ、本件企画の経緯につき総理府広報室担当官鈴木事務官より聴取したところ次の通り。

2. 総理訪米の日程が近づいてきたので、当室としては総理訪米の意義を国民に正しくPRする目的で本件企画を考え、まず外務大臣にもお願いしたが断られた。

(此:ポルー関係せず)

本件企画について総理府官房はなんら相談されていない。

GA 6 外務省

それで官房長官にお願いすることになり、保利官房長官と長谷川キ次との対談の形に決った。官房長官は二件に同じものを出すのも芸がないとのコメントがあったので、急きょ大浜信泉と村松剛との対談のものをつくった。前者のがサンケイ新聞、後者のが東京新聞である。

3. なお当方より本件企画に際し総理周辺より依頼ないしSuggestはなかったかの質問に対しそういう空気が段々に強くなっていたことはあるが当室の自主的な企画である旨述べた。

GA 6 外務省

アメリカ局長
参事
北米第一課長

佐藤

総理府広報室の新聞広告について

44.12.16
米北一

国内広報課より別添同課メモの通り、12月20日(土)付サンケイ新聞朝刊に掲載予定の広告資料の検討方要請越した。

共同声明案と突合したところ、一部変更を加えている個所があるが、共同声明に忠実にそった表現とすべきと思料されるので、この線で加筆訂正。また「琉球」を「沖縄」に統一したが、右にて宜しきや、お伺い申す。

原議 国内広報課へ

北米オ一課長

総理府広報室の新聞広告について

44.12.16
国内広報課長

総理府広報室では12月20日(土)付サンケイ新聞朝刊に「こんぱくの海とがじゅまるの緑が再び」と題する沖縄返還についての広告を出す事になり、掲載資料として「沖縄問題討議の歩み」(別紙A)を作成し、当省に対し検討方依頼越したので、しかるべくご検討願います。(別紙Aは先般貴課に作成頂いた「沖縄返還交渉の歩み」(「自衛の動き」12月15日号掲載済み)の総理・米大統領会談の部分を参考としたもの)

なお「本文」(別紙B)を参考までに添付します。

GA-6 外務省

サンケイ（朝刊）
44. 12. 20

沖縄問題討議の歩み

○岸・アイゼンハワー（昭32.6）
総理は、沖縄(及び小笠原)に対する施政権の日本国への返還についての日本国民の強い希望を強調。大統領は日本国がこれらに対する潜在主権を有するという合衆国の立場を再確認した。

○池田・ケネディ（昭36.6）
総理と大統領は、日本が潜在主権を保有する沖縄に関連する諸事項に関し、意見を交換した。

○佐藤・ジョンソン（昭40.1）
総理は、沖縄の施政権ができるだけ早い機会に日本へ返還されるようにとの願望を表明。大統領は、施政権返還に対する日本の政府および国民の願望に対して理解を示した。

○佐藤・ジョンソン（昭42.11）
総理は、両国政府がここ両三年内に双方の満足しうる返還の時期につき合意すべきであることを強調し、大統領は、沖縄の本土復帰に対する日本国民の要望は十分理解しているとのべた。
討議の結果、総理と大統領は、日米両国政府が沖縄の施政権を日本に返還するとの方針の下に、沖縄の地位について共同かつ継続的な検討を行なうことに合意した。

○佐藤・ニクソン（昭44.11）
総理と大統領は、1972年中に沖縄の施政権をわが国に返還し、返還にあたっては日米安保条約および関連取決めをそのまま沖縄に適用することに合意した。
大統領は、核兵器に対する日本国民の特殊な感情および、これを背景とする日本政府の政策に深い理解を示し、沖縄の返還をこの日本政府の政策に背馳しないよう実施するむねを確約した。

総理府広報室

沖縄100万の同胞と共に全国民の願いであった沖縄返還が、佐藤・ニクソン会談できまり、核抜き、本土並み'72年返還という国民の総意にそった形で実現することになりました。
戦争で失った領土が、平和のうちに返還されることは世界の歴史上も極めてまれなことです。これは戦後日本国民がえいえいと築き上げてきた国力と、日米両国間の信頼と友好関係のたまものです。
思えば長い年月…同じ日本人でありながら本土と隔絶した生活を強いられてきた沖縄県民の喜びは察するに余りあります。
もうすぐ、**がじゅまる**の巨木の下、青く澄んだ海を沖縄の同胞と心おきなく泳ぎまわるときがきます。